

血盟団事件、千年王国、キリスト教左派
League of Blood, Millenarians and Christian Liberals

加藤知子
Tomoko KATO

Abstract

Christian liberals in Japan and the Christian groups that they belong to have been strongly critical of Modern Japan since the end of World War II. National Christian Council in Japan (NCC) is one of such groups which have condemned Modern Japan and her alleged military policies before and during World War II. To them, attacks like League of Blood Incidents and the May 15 Incident, therefore, must be the core of the so-called Japanese militarism in the 1930s and 40s which they believe led Japan to the war against the UK and the USA inevitably. However, the main antagonists of such incidents and the NCC members in fact share strikingly similar beliefs with some superficial differences between them.

Even in the 21st century, when new historical materials are available for ordinary citizens to examine, Christian liberals in Japan do not seem to have changed their historical view of Modern Japan. It seems as if the strong criticism against her has become a part of their Church lives and Christian beliefs. If they come across such new materials and encounter historical facts that they have never met, however, they should realize that the people they have been critical of are actually their own shadows in a mirror.

This irony, which Christian liberals have not yet recognized, must be due to the fact that they have been strayed from the Gospel of Jesus Christ, the essential document of their Church. They have replaced and / or blended the Gospel with their historical interpretation, which, ironically, has blinded their scientific sharp eyes in their study of history. Being a genre of social science, history must be well taken care of by scientific minds. As for the Japanese Christian liberals, they should go back to the basics of the Christian Church: the salvation through Jesus Christ, leaving the historical studies in the field of science.

キーワード：日本基督教界、近代日本歴史認識、信仰と歴史学との棲み分け

I. はじめに

2015 年は、第二次世界大戦終戦後 70 年を記念する年である。大戦当時実際に戦いを経験している人々の多くはこの世を去り、同大戦は体験から歴史へと移りつつある。歴史を研究領域とする歴史学は社会科学の一種であり、史料を基にして仮説を立て、更に史料にあたり、仮説の妥当性を検証する。史料と仮説との整合性が取れなければ史料に合うよう

に仮説を修正する。仮説のほうに史料を合わせようとして史料を無視したり、隠蔽したり、脚色するなどの行為は、科学的とはいえない。史料を基にした仮説検証の営みを続け、過去の出来事の真相を探究していくのが歴史学のあるべき姿であろう。

日本においては永らく、日本近代史については所謂自虐史観と呼ばれる歴史認識が優勢であった。手にできる史料から歴史観を構築すると、所謂自虐史観と言われるものになったのであろう。ところが、20世紀の終わりになり、旧ソ連と米国との間に交わされていた暗号解読作業の一部が公開されるなど、新たな史料を、歴史学徒でなくとも、容易に検討することが可能になってきた¹。また、国際社会がグローバルに展開する現在にあって、日本から海外に出かける日本人が増加し、アジア諸国で、第二次世界大戦とその後の日本兵の戦いぶりのおかげで、独立を成し遂げたのだとの言葉を直接聞く者も出てきた²。更に、インターネットの普及のせいで、これまで所謂右翼思想家と呼ばれる人々しか聴くことのなかった講演などを、それ以外の人々も自宅に居ながら聴き、それら思想家が提供する史料の存在を知ることにもできるようになった³。

昨今、若者の右傾化などと言われるが、インターネットなどでこれまで未知であった史料の存在を知り、その史料を自分なりに検討した結果、所謂自虐史観から離脱する若者が増えているからなのではないかと想像される。そのような動きに必ずしも賛同する必要はないが、歴史観の右傾化は警戒されなければならない、と言うのであれば、右傾化を促している保守系の歴史認識に対する妥当な反論が、適切な史料に基づいて展開されない限り、若者だけでなく大人たちもがこれまで馴染んだ歴史認識から離れていく流れを、止めることはできないだろう。

日本の基督教界は、第二次世界大戦後、＜旧日本軍＝悪＞論に基づき活動を展開してきた者が優勢であった。例えば、加藤（2014）で取り上げた日本キリスト教協議会（以下、NCC）も同様で、旧日本軍とその統帥権を持っていた天皇、また天皇が祭祀としての力をふるっているとされる神道に対する NCC メンバーらの厳しい姿勢は揺るぎがない。NCC による歴史検討のプロセスから漏れたと思われる史料が、歴史学専門家だけではなく、一般国民の目にも容易に触れることの多くなった 21 世紀の現在でも、日本や天皇、旧日本軍や神道に対する攻撃的とも言える NCC の態度は変わる気配はないようだ。

NCC のサイトによれば、同団体の基本姿勢は、「日本国家によるアジア・太平洋地域へ

¹ Haynes, J.E. and Klehr, H. (1999) *Venona—Decoding Soviet Espionage in America* [ジョン・アール・ヘインズ&ハーヴェイ・クレア『ヴェノナ』中西輝政監訳、PHP 出版、2010 年]に詳しい。

² 手束正昭（2013）pp.58 - 60 によれば、筆者がインドネシアで、インドネシア人から、第二次世界大戦中の日本兵とその後インドネシアに残留して独立戦争を戦った日本人たちのおかげでインドネシアは独立できたのだ、と感謝された旨、記録されている。

³ 例えば、真の近現代史観懸賞論文第一回最優秀藤誠志賞を受賞し、そのことが問題視された田母神俊雄は、近代日本を巡る歴史認識をはじめ、日本の安全保障について各地で講演している。それらは録画され YouTube などで閲覧できる。インターネット動画配信技術普及前であれば、そのような講演に参加する者はごく少数であろうから、田母神が提供する情報を知る者もわずかであったであろう。また、懸賞論文もインターネット上で入手可能で、関心のある者は自分の目で内容を確認することができるが、これも、インターネット普及以前であれば、一般国民は通常のメディア報道だけを手掛かりに田母神に対して判断を下していたはずだ。

の侵略戦争に協力した日本基督教連盟から続く過去の歴史を自らのものとして受け止め、神とアジア・太平洋地域の人々になした罪責を告白し、正義と信頼に基づいた平和な関係を築く努力を続け」⁴、「弱くされた人々、苦しみにある人々との『いのちの痛みに』共感する生き方を求めて」⁵いくことだとされる。そこから、「天皇制強化、有事法制化、憲法改悪の流れに反対」⁶という活動がなされていくわけであるが、これは、社会や歴史をく虐げる者 VS 虐げられる者>との対立という視点で捉え、革新／革命的・平等的信条、すなわち、しばしば言われるところの左派系思想と親和性の強い信条を旨とする NCC ならではのものであると言えよう。

近代日本はいくつかの事変や事件、例えば、血盟団事件、五・一五事件、二・二六事件などを経て軍事主義的色合いを強め、軍人である東條英機が内閣を組織し、軍隊の頂点にあった昭和天皇が戦争への道を裁可した後、第二次世界大戦へと突入した、というシナリオが NCC にとっては正史であるなら、軍事的クーデターなどを試みた旧日本軍の軍人など、罪の結晶のような存在なのかもしれない。

しかしながら、第二次世界大戦への前哨戦であるという文脈で捉えられていたいくつかの事件についても近年、新しい世代の研究者による研究成果が発表されてきており、一口に軍国主義の結実であると片づけられない一面も我々の目に提示されるようになった。そこで、本稿では、NCC が非難して止まない近代日本人が引き起こしたとされる軍国主義的行動と、NCC を支える、革新／革命的・平等的信条とは実は鏡像のような立場、あるいは、双子のような関係にあることを、中島岳志『血盟団事件』とノーマン・コーン『千年王国の追求』を手がかりに示してみたい。

Ⅱでは、中島岳志『血盟団事件』を基に、血盟団事件について概観する。続くⅢでは、ノーマン・コーンが『千年王国の追及』で詳細に描き、いくつかのパターンにまとめた種々千年王国運動の共通点を紹介する。Ⅳでは、血盟団事件（それに続く五・一五事件も）と、長きに亘って西欧で見られた革命的千年王国運動の間の類似点を指摘する。両者は場所も時代も異なっているのだが、驚くべき類似が見られる。そしてⅤでは、近代日本に対して批判を続ける日本の基督者リベラル派の信条は、自らが批判をする対象である近代日本の歴史的流れの中核を担ったとも言える、各種事件を引き起こした若者らの信条と鏡像あるいは双子のような立ち位置にあることを論じる。

Ⅱ. 中島岳志『血盟団事件』に見る血盟団事件

本章では、中島岳志『血盟団事件』を基に、血盟団事件、特に、それを引き起こしたメンバーらについて概観したい。

血盟団事件とは、1932年（昭和7年）、後に血盟団と呼ばれるようになったグループが、前大蔵大臣の井上準之助と三井財閥の団琢磨を暗殺した事件である。同年5月15日には、海軍青年将校らが内閣総理大臣犬養毅を殺害するという、五・一五事件が発生する。血盟団事件と五・一五事件は別物ではなく、『血盟団事件』によれば、もともと一つのサークル

⁴ <http://ncc-j.org/modules/pico/>（2015年12月2日閲覧）。

⁵ 同。

⁶ 同。

を形成していた若者たちが、海軍青年将校らを除いた、民間と言われた者たちだけでまずは行動を起こそうと決意した結果引き起こされたのが血盟団事件であり、その際逮捕を免れた海軍青年将校らにより実行されたのが五・一五事件であるという⁷。

『血盟団事件』の冒頭では写真入りで、血盟団の中心となる人物を紹介している。カリスマ的役割を果たしたのは宗教家の井上日召で、『血盟団事件』第一章は、この井上の生い立ちを詳しく紹介している。それによれば、井上の歩んだ道とは次のようにまとめられる。

井上は群馬県北部の川場村出身で、若い時から流浪とも言える生活を送っている。前橋中学校在学中、キリスト教会に出入りし受洗までするが、結局は教会からは遠ざかってしまう。中学卒業後は病院船に乗り長崎まで行き、三菱造船所で働くが（ここではストライキを企画）、その後前橋に戻り代用教員として教え始めるものの、病気で倒れ、療養生活を送る苦境に陥ってしまう。その後東京に行き、中野で兵役につく。兵役後は早稲田大学予科英文科に入学するけれども、結局は退学、東洋協会専門学校に入学する。しかしながら、同校も辞めることとなり、井上は満州に渡る。大連の南満州鉄道株式会社従業員養成所で職業訓練を受け、遼陽で陸軍の諜報活動の手助けをするようになる。その合間に革命志向の中国人と接触したりするが、革命運動は失敗、その後公主嶺に赴く。ここでは禅宗の僧侶との出会いがあるけれども、一方で蒙古独立運動支援なども行っている。その独立運動が発覚し、井上は北京に逃れる。そこで彼は霊夢を見、その体験後法華経に深く傾倒していくことになったという。

井上は日本帰国後、川場村で南無妙法蓮華経を一心に唱え、次々と霊的体験をする。描かれていないはずの絵が襖に浮かび上がって見えたり、蛇や木や石や花などと自由に意志を通じあったり、病気を治したり、自分の力だけではできないような大説法を唱えたり、等である。そしてついに、井上こそが救世主であるという天からの声を聞くに至る⁸。

最終的には大洗護国堂という建物を活動の拠点とすることになるのであるが、井上はそこに至るまでに、田中智学『日蓮聖人の教義』に親しんだり、日蓮宗本山の身延山に登ったりして日蓮宗の学びを深めると同時に、国家改造運動に取り組んでいる日本主義団体（大川周明の行地社や、西岡元三郎創立の星光同盟など）と接触する。また、日蓮主義者の議論とはやや距離を置いて、静岡まで禅修行にも赴いている。教育・職業・宗教・政治的活動において遍歴を重ねた後、井上は、誰にも頼ることなく、護国堂を活動拠点として、自分がリーダーとなり、国家改造を実行することを決意することになったという。

『血盟団事件』第二章以降では、その井上の周りに集まってきた青年たちが紹介されている。彼らが後に、血盟団事件や五・一五事件などを起こしていくのであるが、血盟団事件を起こした主なメンバーは、大きく三つのグループに分けられている。その中で大洗グループと称されるメンバーは、元教員の古内栄司や堀川秀雄、古内の同僚である照沼操、前浜小学校補習学校で古内の教え子となった黒澤大二、黒澤の親戚である小沼正、元学生の菱沼五郎、小沼・黒澤の親戚で、活字販売店での勤務経験もある川崎長光である。小沼は後に前大蔵大臣の井上準之助を、菱沼は三井財閥の団琢磨を殺害することになる。川崎

⁷ 『血盟団事件』 p.383。

⁸ 井上は、朝比奈知泉のアドバイスに従い、<昭>という名前を<日召>と変え、文字通り、お天道様に召された者、すなわち、この救い主としての歩みを進めることになったという。

は、西田^{みつぎ}税に重症を負わせている。西田は、一時血盟団メンバーらと道を共にするかの如く見えながら結局裏切り者となった（少なくとも彼らには裏切り者として映った）人物であるという。

東京帝大グループと称されるメンバーは、元東京帝大法学部生の四元義隆、元東京帝大文学部生の池袋正鈇郎、東京帝大文学部生久木田^{すけひろ}祐弘、東京帝大法学部生田中邦雄である。京都グループと称されるメンバーは、京都帝大文学部生の田倉利之、京都帝大法学部生の森憲二と星子毅である⁹。

井上の活動拠点である護国堂に集う形で、大洗青年らと交流を持つことになった海軍青年将校らは藤井^{ひとし}斉、鈴木四郎、大庭春雄、伊東亀城、村山格之、古賀清志である。古賀は後に、五・一五事件の首謀者となる。佐賀の藤井の自宅で井上らと接触するのは、同じく五・一五事件で犬養毅首相を撃つことになる三上卓である。その他、山岸宏が、藤井の紹介で横須賀の地で井上に紹介されたという。

井上や大洗青年らと海軍青年将校らとの接点であった藤井斉は上海事変で戦死してしまうが、『血盟団事件』によれば、彼の遺志を継ごうとする若者たちが後に血盟団事件と五・一五事件と呼ばれる事件を引き起こしていったのであるという。当時は国内外が揺れ動き、農民や都市労働者らの日常生活は逼迫していた。財界大物と近距離にある政治家たちは抜本的改革策を打ち出せずにはいた（少なくとも、血盟団メンバーや青年将校らにはそのように映った）ため、若き自分たちこそが捨石となり、メンバー一人が捨て身の覚悟でそれぞれ一人の政治家や財界人を次々と殺傷すれば、天皇と臣民の間の障壁となっている君側の奸を取り除かれることとなり、国家改造の起爆剤となるのではないかと判断した結果の行動であったというのである。『血盟団事件』では、これを「宗教的自己犠牲によるテロの実行という構想」¹⁰という表現でまとめている。

Ⅲ. ノーマン・コーン『千年王国の追求』が描き出す西欧千年王国運動

『千年王国の追及』の著者ノーマン・コーンが同著で主題として扱っているのは、「十一世紀から十六世紀にかけて西ヨーロッパにあらわれた革命的千年王国主義と神秘主義的アナーキズムの伝統」¹¹である。この伝統は、根無し草的貧民の間で大きな支持を得たが、コーンは、これは、単なる「一揆とは全く異質のもので」¹²あり、そして、この伝統の枠組みで展開された革命的千年王国主義と神秘主義的アナーキズムは、20世紀の「いくつかの大きな革命運動の真の先駆であったことを示唆するものである」¹³としている。

コーンは、第一回十字軍における貧民たちから16世紀のヤン・ボッケルソン（ライデンのヨハネ）によるメシア治世までを丹念に紹介しながら、西欧で繰り返し立ち現われた革命的千年王国主義と神秘主義的アナーキズムについて詳述している。

コーンは数々の運動を紹介しているが、本稿では紙幅の関係上、『千年王国の追及』262ページ以降に記載された、ルター主義とローマ・カトリック両者に反対する形で生まれた

⁹ その他、国学院大学神学部生の須田太郎も血盟団メンバーとして紹介されている。

¹⁰ 『血盟団事件』p.389。

¹¹ 『千年王国の追及』p.1。

¹² 同 p.6。

¹³ 同。

アナバプティストらの運動に、革命的千年王国主義の一例として言及したい。

(1) アナバプティストの戦闘的千年王国運動

アナバプティストとは、西欧における宗教改革時代、ルター派にもローマ・カトリック教会にも反対する形で出現した人々を指す。彼らの大半は、異議申し立ての態度は厳しいものであるにせよ平和的であったらしいが、一部は戦闘的様相を帯びたという。『千年王国の迫及』でコーンが扱っているのは、この、「戦闘的千年王国主義の伝統」¹⁴の中に運動を展開したアナバプティストたちであり、その戦闘的集団を牽引したリーダー格の人物、ハンス・フート、ベルント・ロートマン、ヤン・マティス、ヤン・ボッケルソンを丁寧に描き出している。以下、『千年王国の迫及』262 ページ以降の記述に基づき、彼らについてと、アナバプティストの戦闘的千年王国運動についてまとめる。

戦闘的千年王国運動の中核となった人物の学歴・職歴は一見多岐に亘る。ヤン・マティスはパン職人、ハンス・フートは巡回製本屋であった。ベルント・ロートマンは礼拝堂付き司祭で、もともとは鍛冶屋の息子だが、大学教育も受けていたという。ヤン・ボッケルソンは仕立屋の徒弟ながらも、ある程度の教育は受けていた。多様に見える彼らではあっても、いずれの人物も、ある程度書物に親しみ、よって書物を手掛かりに学問をかじることぐらいはできたらしい。

彼らは千年王国主義に立ち、フートは、1528 年の聖霊降臨節に地上に再臨したキリストが千年王国を築くと説教したという。ロートマンの書いた宣伝文書には、「千年王国主義と原始主義のよくみられる融合ぶり」¹⁵が見られ、また、マティスは、「義しき者は剣を取り、不義なる者に剣をふるって千年王国への道を積極的に準備しなければならない」¹⁶と説いたという。そして、ボッケルソンは、終りの日のメシアとして君臨しようとし、実際、ミュンスターという地において、一年有余統治者として周囲の諸公国連合に対して抵抗活動続けた。

彼らはカリスマ性も持ち合わせていた。ロートマンは若く能弁であったというし、ボッケルソンも容貌美しく、弁舌家であったらしい。また、彼は、自らの演劇の才能の故なのかはわからないが、神憑りの的であり、ある時には、丸裸かのまま狂乱の態で町を駆け抜けていったかと思えば、三日間の沈黙の恍惚状態に陥ったという。その後、ボッケルソンは民衆に、自分は神から啓示を賜わり、ミュンスターの町を、神のわざである新制度に変えるようにと命ぜられたのだ、と告げたという¹⁷。

フートやロートマン、マティスやボッケルソンが活動した 16 世紀は宗教改革の真っただ中であり、それに加えて農民戦争も広く行われていたから、社会の根幹が大きく揺れ動いた時代であった。このような不安定な時期には、力強い王や皇帝（あるいは、彼らに代わる者）を民衆は求め、そのようなリーダーを後押しする、あるいは、先駆けとなる形で、革命主義的になることがしばしば見られるが、戦闘的アナバプティストの支持者は、一部

¹⁴ 同 p.265。

¹⁵ 同 p.277。

¹⁶ 同 p.271。

¹⁷ 同 p.280。

の富裕層にも見られたものの、「無産者や故郷喪失者や社会の落伍者」¹⁸に広がっていったという。コーンは「失業して捨てばちになった外国人の群集に支持される強力なアナバプティスト運動」¹⁹と述べているが、ボッケルソン自身、流れ者であったらしい²⁰。

アナバプティストらは平和的な信者も含めて概して排外的であったようであるが、戦闘的な者たちは、自分たちの信条純化を図るために暴力的手段に訴えることもためらわなかったようである。しかしながら最終的には、司教らが率いる軍隊のために戦闘的なアナバプティスト運動は屈服させられた。最初はその革命的千年王国主義が勇ましく、民衆を多く魅きつけたとしても、自らの主義純化のために暴力手段を厭わないことに加え、リーダー格の人物が元来、統治の術とは無縁の階層出身であることから、外部からの攻撃だけではなく内部崩壊と相まって、運動が永続性を持つことはなかった。この点は、『千年王国の追及』で紹介されている、他の革命的千年王国主義の末路も同じである。

(2) 革命的千年王国主義の共通点

『千年王国の追及』で紹介されている歴代の革命的千年王国運動の主役は各々異なるけれども、これらの運動には共通のパターンが見られる。コーンは、『千年王国の追及』結論の部分でそのパターンをまとめているが、それらは以下のとおりである。Ⅲ.(1)で紹介した、アナバプティストらの戦闘的な千年王国運動もこのパターンにあてはまっている。

- ①指導的役割を果たした預言者たちは、多種多様な資料²¹に手を加え、再解釈し、通俗化して、各自の黙示伝承を作りあげた。
- ②これらの運動の主役たちは、自分たちの運動を「世界を全く変貌させ復活させる大動乱」²²だと考えていた。
- ③預言者たちに付き従う人々は、預言者が自分たちを、上手くまとめあげてくれるものと期待した²³。農村でも都会でも、組織の基盤がなく、住民がばらばらになっているのが顕著な場所で支持者が多く現れた²⁴。
- ④貧民らにとってリーダーたる君主は、「宇宙を支配する力の代表であり、人倫の道と神の意志の体现者であり、世界の秩序と正義の保証人であった」²⁵。
- ⑤運動の中核である預言者たちは自分たちの運動が聖書黙示的、すなわち、世界を浄化する最後の戦いなのだと主張した。社会的緊張と全国的反乱の機運が高まると、この種のような預言者たちが現れやすかった。彼らは社会の周辺部に登場し、貧しい民衆の信者を従えた²⁶。

¹⁸ 同 p.269。

¹⁹ 同 p.270。

²⁰ 同 p.272。

²¹ ダニエル書、ヨハネの黙示録、シビュラの託宣、フィオレのヨアキムの瞑想録、平等主義的自然状態の教義など。『千年王国の追及』p.294を参照。

²² 同。

²³ 同 p.295。

²⁴ 『千年王国の追及』pp.294-295。

²⁵ 同 p.296。

²⁶ 同 p.297。

⑥預言者たちは黙示幻想の中におり、自分の集団の絶対無謬性を信じていた。そのため、自分たちが信じている使命とは異なる主張を認めなかった。結果として彼らは、驚くほど活動的になるけれども、異議を唱える者たちには冷酷無残に振舞った²⁷。

コーンがまとめる、革命的千年王国運動の預言者らに見られる共通点は、上記で紹介したものに加え、次のとおりである。

①彼らは皆、黙示録的・千年王国的預言の世界に詳しかったが、知識階級もしくは半知識階級であり、もともと司祭であった者がその後、所属のない説教師となったというパターンが多く見られた²⁸。

②人を魅きつける力を備えていた²⁹。

社会が動揺し、本来の要であるはずの君主や教会がその役割を果たせないと民衆が感じるとき、社会の周辺（頂点ではないが、底辺でもない）からカリスマ性のある人物が登場し、世界浄化の戦いの旗を掲げて民衆の支持を集める。彼らは世界浄化の大義ためなら攻撃的になることは厭わず、民衆も彼らに期待する。そのような運動が、表面上の違いはあるけれども、西欧で何世紀にも亘り繰り返されたのである。

IV. カリスマ的宗教指導者、中級・下級知識人、貧困層、復古主義

革命／テロ／クーデターは西欧だけの出来事ではなく、人類史上世界の各地で見られたものである。例えば、本稿で言及している血盟団事件や五・一五事件も、世直しを図った（という意味で革命的）若者たちによる殺傷事件（という点でテロ事件）であり、彼らは当時の政府を覆し（すなわちクーデター）、新日本建設を目指して活動していた。

血盟団事件や五・一五事件は 1930 年代の日本における出来事であるが、何世紀に亘って西欧で見られた革命的千年王国運動と極めて似ている。革命（やテロやクーデター）が起きやすい社会状況下では、同じような人物が同じような信条の下、同じような方法で活動することになるのが人類の常なのかもしれないけれども、本章では、血盟団事件や五・一五事件と、西欧の革命的千年王国運動との類似点をもう少し詳細に指摘したい。

（1）どのような人物が運動の中心になったのか

運動の中心人物は、血盟団事件や五・一五事件でも、西欧の革命的千年王国運動でも、社会階層の上層でも最下層でもない、中間のやや下ぐらいの層から出ている知識人／半知識人である。また、彼らは流浪の民であり、既成団体からは距離を置いた場所で活動している。例えば、上記Ⅲで言及したボッケルソンらは超一流の知識人というわけではないが、書物を読んだの学問ができる程度には教育を受けており、上層階級の人間ではないけれども、社会の底辺で生活してきたというわけでもない。当時ヨーロッパの最下層の人々は、

²⁷ 同 p.298。

²⁸ 同 pp.297-298。

²⁹ 同 p.298。

ほとんど文字が読めなかったが、ボッケルソンらは全くの無学ではなかった。しかしながら一方、アナバプティストと呼ばれた彼らは、当時権力を持っていたローマ・カトリック教会や、それに対抗する勢力としては大御所のルター派のメンバーでもなかった。

血盟団の中心人物は井上日召で、決して裕福ではないけれども、最下層の生活をずっと続けていたわけではない。退学はしてしまったが、当時としては珍しく、早稲田大学や東洋協会専門学校での学びの経験もある。田中智学『日蓮聖人の教義』などの書物を読み込む力もあったから、彼も社会の中の下ぐらいに位置する知識人／半知識人と言ってよいだろう。

彼を中心に集まった青年たちの中に帝大生らがいる。一見彼らは血盟団の中では異色のように見えるけれども、革命運動を志向していた当時は＜大学の先生＞でもなく、私塾を経営するわけでもなく、まだ単なる学生で、学力／知力はある、学びの意欲は旺盛であったかもしれないが、例えば安岡正篤^{まきひろ}などのような社会的影響力はなかった。知識人の社会的序列に彼らの位置を求めれば、やはり中の下ぐらいということになるのではないだろうか。

一方、大洗出身のメンバーらの中には、例えば古内栄司のような元教員が含まれている。彼は＜先生＞になったけれども、それは大学においてではなく小学校である。しかしながら、茨城県師範学校での学びがあり、全くの無学というわけでもない。黒澤大二の教養は小学校での補習学校であるが、彼の伯父は地元では有力者であったという³⁰。小沼正の学歴は平磯尋常高等小学校高等科であるが、彼は黒澤家の親戚でもある。川崎長光も黒澤家とは親戚続きであり、東京の活字販売店で働いた経験があるので、書籍を読み込む力があった。菱沼五郎は東京の岩倉鉄道学校を卒業している。照沼操と堀川秀雄は教員歴があるから、やはり無学の者ではなかった。実際、彼らは薩摩雄次の雑誌『旋風』や鈴木善一の雑誌『明德論壇』などを読んでいたというのである³¹。当時の日本全体から見れば、上流階級ではないけれども、全くの底辺をうごめくことを余儀なくされていた集団というわけでもなかったであろう。

海軍の青年将校らの中心人物、藤井斉の家庭は貧しかったけれども、彼は海軍兵学校で学び、血盟団グループと関わらずにそのまま海軍で奉職すればエリートとしての道を歩めたはずである。しかしながら、井上らと接触を図った当時の藤井には、海軍上層部ほどの社会的発言力や影響力もなかった。だから彼もまた、社会階層の中では中の下ぐらいの位置にいた人物であったといえるだろう。

運動の中心人物が、カリスマ性を備えた宗教家である点も共通している。ボッケルソンは弁舌家で神憑り的なところがあった。井上日召も、霊的体験をしたり、病人を癒したりなど、所謂普通の宗教家とは異なる側面を持っており、また、「目前の相手を射抜く対話術に長け」³²ていたという。井上は日蓮主義に傾倒しながらも、禅にも興味を持ち、更に、宗教家になる前には陸軍の諜報活動を手助けするなど、流浪の道を歩んでいる人物でもある。

³⁰ 『血盟団事件』p.123。

³¹ 同 p.169。

³² 同 p.157。

(2) どのような信条の下に運動を続けたのか

西欧の革命的千年王国論運動家も、血盟団メンバーらも、自分たちこそが世の中を変えるのだ、と強く信じていた。彼らは様々な資料にあたり、自分なりに解釈を加え、驚くべきことに、両者ともども極めてよく似た終末的信仰を持つに至っている。

井上にとって日本の自然状態とは天皇・国民（臣民）一体の、天皇の下の方民平等状態であり、それにより世界平和の範となれるほどの理想社会である。しかしながら現実には、少数の大資本家や大政治家などの特権階級のために搾取が横行し、日本の元来の国相が失われている。だから、日本は本来の国体に回帰しなければならない。そうすれば、日本はもちろん、世界も平和裏に統一されることとなろう、と井上は考えた³³。

西欧の革命的千年王国運動が影響を受けた中に、「歴史を三つの連続的時代の上昇過程として捉え」³⁴という歴史の見方がある。これは、フィオレのヨアキムという大修道院長・隠修士によって創始せられたという³⁵。この「歴史を三つの時代に分ける考え方」は、ノーマン・コーンによれば、オーギュスト・コントの歴史観（神学的段階・形而上学的段階・科学的段階）、マルクス主義的弁証法（原始共産主義、階級社会、自由の世界となって国家が消滅する最後の共産主義）等にも見られるという³⁶。このような歴史を三つに分ける見方が、平等であった黄金の過去への回帰こそが我々の未来だという考え方や民衆の終末論的幻想と融合された土壌で、革命的千年王国運動が生み出されたとコーンは総括している³⁷。すなわち、かつてこの世は平等で平和であった。しかしながら、（墮落した教会などの）ルークスリア 贅沢と貪欲アパリチアのせいで、その平等性は失われてしまっている。だから、今こそ救い主を待ち望もう。救い主は再臨され、平等で幸せであった過去の黄金時代を復活させてくださるだろう、そのために我々は今活動を開始しなければならない、というわけである。

血盟団事件においても、西欧の革命的千年王国運動においても、＜素晴らしい過去・それが失われた現在・過去に回帰する形での黄金の未来建設＞というパターンが見られる。また、平等主義が理想であると考えられていたのも、両者に共通している。そして、この平等主義を実現するために手段を選ばず、武力を用いた暴力的行動を取るに至り、暴力的（だと少なくとも彼らが考えていた）既成特権階級に異議申し立てをする彼ら自身が意図する／しないに拘わらず、暴力的になってしまった点も同じである。

異なるのは、本稿Ⅲで紹介したアナバプティストのボッケルソンらは運動に一応の成功を収めた後、自らが＜メシア治世＞を敷いてしまったが³⁸、血盟団員や海軍青年将校たちは、自分たちがまず捨石になることだけに専念したという点であろう³⁹。日本では、社会階層の底辺に位置する人々を巻き込んだ運動には発展しなかったし、血盟団や海軍青年将校らと井上日召が牽引する国家建設も見られなかった。ただし、五・一五事件後、「政党

³³ 『血盟団事件』 pp.154 - 157。

³⁴ 『千年王国の追求』 p.104。

³⁵ ヨアキムは基督教の、父・子・聖霊の三位一体の神観に基づき、歴史を第一・第二・第三の時代をそれぞれ、＜父＞の時代、＜子＞の時代、＜聖霊＞の時代に分けた。

³⁶ 同 p.105。

³⁷ 同 p.203。

³⁸ 『千年王国の追求』 pp.283 - 293。

³⁹ 『血盟団事件』 pp.285 - 291。

政治や財閥への反感から厳刑嘆願運動が起こり、百万通を超える署名が集まった」⁴⁰というから、彼らの革命運動は貧困層に広く支持されたと言えるだろう。しかしながら、日本において当時その権力を奪取したのは貧民らではなく、青年将校たちを政治利用して政治の表舞台に躍り出たのは、藤井斉たちが非難して止まなかった特権階級と何ら変わらない（と彼らが考えていた）軍部の指導者であった⁴¹。

V. 血盟団事件、五・一五事件、西欧革命的千年王国運動、そして基督教リベラル神学

前章では、血盟団事件、それにつづく五・一五事件と、長きに亘って西欧で見られた革命的千年王国運動の間の類似点を指摘した。

加藤（2009）では、西欧革命的千年王国運動の、「＜虐げる者対虐げられる者＞」といった構図が新たな形で立ち現れているのが見えるのは、＜抑圧者 VS 被抑圧者＞という階級闘争の形を取る、所謂リベラル派と呼ばれる人々の中に見られる神学」⁴²である点に言及した。リベラル神学とは、20世紀のカウンター・カルチャーの社会的雰囲気の中で生み出された、解放の神学・黒人神学・フェミニスト神学・エコロジー神学を指すが、宮平望『現代アメリカ神学思想』によれば、これらは皆、「すべて広義の解放の神学として位置づけることができる」⁴³という。非白人・女性・自然の、抑圧からの解放を志向するこれらの神学では、解放の担い手は被抑圧者であり、彼らが＜抑圧者 VS 被抑圧者＞の垣根を取り払う時、至福が訪れる。ここに終末的色合いを添えれば、何世紀もの間繰り返し西欧で見られた革命的千年王国と基本的には同じものになる。

NCCの基本姿勢とその具体的現れについてもう一度、NCCサイトから引用しつつ、ここで確認すると、NCCの基本姿勢とは、「日本国家によるアジア・太平洋地域への侵略戦争に協力した日本基督教連盟から続く過去の歴史を自らのものとして受け止め、神とアジア・太平洋地域の人々になした罪責を告白し、正義と信頼に基づいた平和な関係を築く努力を続け」⁴⁴、「弱くされた人々、苦しみにある人々との『いのちの痛みに』共感する生き方を求めて」⁴⁵いくことであり、それを具体化する形で実施されるNCCの活動は、日本国憲法遵守、天皇制強化・有事法制化・憲法改正反対、アジアの人々との信頼関係の構築、部落差別や障害者差別に抗する取り組み、外国人住民基本法案の推進、アジアの人権問題や平和問題、自然災害や、難民救援のためのプログラム、開発プログラムなどへの支援、相互理解のための対話プログラムや平和・人権・反原発などの課題についての宗教協力、等となっている⁴⁶。

これらの活動の公約数を拾ってみると、そこには、＜虐げる者 VS 虐げられる者＞、＜抑圧者 VS 被抑圧者＞の対立を乗り越える、という構図が浮かび上がってくる。すなわち、（NCCが天皇制によって抑圧されていると考える）人々の解放、（同じくNCCが、かつ

⁴⁰ 同 p.386。

⁴¹ 同。

⁴² 加藤（2009）pp.5-6。

⁴³ 『現代アメリカ神学思想』p.13。

⁴⁴ <http://ncc-j.org/modules/pico/>（2015年12月2日閲覧）。

⁴⁵ 同。

⁴⁶ 同。

て旧日本軍人らによって虐げられたと考える) アジアの人々の解放、(更に、NCC が、現在の日本で差別されていると主張する) 被差別部落の人々／外国人／障害者の解放、その解放運動の先陣を切るのが NCC である、という図式である。

しかしながら、＜抑圧者 VS 被抑圧者の対立を乗り越えるために、自らが先陣を切る＞というのは、血盟団事件や五・一五事件を起こしたメンバーらの主張と瓜二つなのである。例えば、カリスマ的宗教家井上日召の考えは、『血盟団事件』では、次のようにまとめられている。

「井上は、自らの勢力を使って国家改造を成し遂げようと考えた。既成政党は墮落し、特権階級は利益を独占していた。農村はますます疲弊し、弱者が困窮にあえいでいた。世の中は閉塞感に覆われ、既得権益への批判が蔓延した。」⁴⁷

「井上は護国堂を拠点に、自らが指揮する形で国家改造を行おうと決心を固めた。」⁴⁸

血盟団メンバーらと交わり、戦死のために事件の実行犯にはならなかったけれども、彼らと海軍青年将校らとの接点としての役割を担った藤井斉の思いは、以下のとおりまとめられよう。

「家族や地方社会の苦しみを目の当たりにすればするほど、革命への意思は強固になった。なぜ、万民の幸福は奪われ続けるのか。なぜ、平凡な幸せが引き裂かれるのか。なぜ、民衆は苦しみ続けるのか。素朴な疑問は、革命の意思へと直結した。」⁴⁹

血盟団メンバーらや藤井などの海軍青年将校らと、NCC との違いは、前者が、天皇の下での万民平等を説く一方⁵⁰、後者は天皇制を打倒すべきものとして捉えているという点であり、これを除けば両者は基本的に＜抑圧からの解放＞という地平に立つ者として、双子のようなものなのだと言えよう。

また、NCC は外国人住民基本法案を推進するとしているが、これは、加藤 (2014) でも指摘したとおり、日本に住んでいれば外国人は誰でも、日本人と同様であるが如くの権利が持てるようにする法律であり、そこには国家という概念がない⁵¹。このように国境を有名無実化する試みは、マルクス主義が理想としたとされる、歴史の三段階目としての「自由の世界となって国家が消滅する最後の共産主義」⁵²を想起させる。そして、血盟団メンバーらもその教えを学んだ農本主義者権藤成卿の社稷ごんどうせいきょうという概念が、しゃしよく「社稷は国家に先行するものであり、民衆社会の社稷こそが普遍だった。もし国家が消滅し、国境なき人類社

⁴⁷ 『血盟団事件』 p.94。

⁴⁸ 同 p.95。

⁴⁹ 同 p.319。

⁵⁰ 同 p.149。

⁵¹ 加藤 (2014) p.22。

⁵² 『千年王国の追求』 p.105。

会が成立しても、社稷は永遠に存続する」⁵³ものであるということを知る時、NCC が批判して止まない、近代日本における軍国主義的雰囲気というものが、実は、鏡像としての NCC 自身に他ならないと結論せざるを得ない、と本稿筆者は思われるのである⁵⁴。

西欧革命的千年王国運動と、所謂リベラル神学とは共通点があり、NCC の基本姿勢やそれを具体化する活動には、リベラル神学と同じ構図が見られる。西欧革命的千年王国運動の延長線上にマルクス主義があり、血盟団メンバーや海軍将校藤井らはマルクス主義についての学びもあった。実際、藤井は「左翼・無産者との連帯を模索した」⁵⁵らしいので、血盟団、五・一五事件関係者、NCC、西欧革命的千年王国運動との間に類似点が見出されるのも不思議ではないのかもしれないが、自分の双子のような人々に対する批判を高らかに謳いあげてを基本姿勢とする NCC の姿は、一種の皮肉とも言えるのではないだろうか。

なお、血盟団メンバーらは、田中智学に影響を受けた。彼は八紘一字の概念を生み出した人物であり、「仏教の教えを記紀神話の中に読み込んだ」⁵⁶ため、天照大神などのタームが彼のレトリックの中に出現するけれども、田中は神道人ではなく日蓮主義者である。田中の著作に感銘した井上も日蓮主義者であり、『血盟団事件』によれば、彼の周りに集まった若者も日蓮の題目を熱心に唱えたという。五・一五事件後、日本の軍人らによる発言力が強まってゆくが、NCC がそれを批判するのであれば、神道というよりはむしろ日蓮主義をターゲットにするべきであろう。しかしながら、NCC の活動年表を見る限り、彼らが日蓮主義を批判した集会やデモ、声明発表や署名活動等をした形跡はなさそうだ。

VI. 結語

本稿では、Ⅱで、中島岳志『血盟団事件』を基に、血盟団事件について概観した。続くⅢでは、ノーマン・コーン『千年王国の追及』でまとめられた、西欧歴代革命的千年王国運動の共通点を紹介した。Ⅳでは、血盟団事件（五・一五事件も）と、西欧で見られた革命的千年王国運動の間の類似点を指摘した。最後にⅤでは、近代日本に対して批判やまない日本基督者リベラル派の信条は、自らが批判する対象である近代日本の歴史的流れの中で、各種事件を引き起こした若者らの信条と鏡像あるいは双子のような立ち位置にあることを論じた。血盟団事件や五・一五事件だけが近代日本の全てを表象しているわけではないが、これらの事件を再検討することにより、＜近代日本＝軍国主義＞という単純な等式で近代日本の歴史を括ることには慎重になるべきだ、という主張の裏づけを提供することはできるだろう。

本稿筆者は、日本基督教界左派による政治的活動をこれまで批判してきた（加藤（2014、2015））。基督者にとって、教会での優先事項はイエス・キリストが救世主であるとの信仰

⁵³ 『血盟団事件』p.311。傍点は本稿筆者による。

⁵⁴ なお、権藤成卿は復古的革新思想を説き、かつては社稷全体の資産であった神聖な土地が、特権階級らにより占有されることとなったが、近代国家や特権階級打破を通して、社稷の復権を図るべきだとした（『血盟団事件』p.312）。ここには、歴史を三段階に分け、黄金の過去の復権こそが未来なのだとする構図が見られる。この点も、西欧革命的千年王国運動との共通点である。

⁵⁵ 『血盟団事件』p.322。

⁵⁶ 同 p.70。

であり、それ以外の事項、例えば、政治的信条や活動が信仰の一部となったり、あるいは信仰と入れ替わったりするかの如くは戒められなければならないはずであるからである。

本稿冒頭でも指摘したが、21 世紀になり、第二次世界大戦で日本が健闘したおかげでアジア・アフリカ諸国は西欧列強からの独立を成し遂げたのだ、という歴史観が日本の中で広まりつつある。日本基督教界では未だ、この歴史観に立つ者は多勢ではないが、それでも、21 世紀に入ってから、＜近代日本＝西欧列強の抑圧からの解放者＞という構図で歴史を読み解く基督者による著作も出始めている⁵⁷。この歴史観の妥当性について論ずるのは、紙幅の関係上本稿では行わないが、しかしながらこれも、＜虐げる者（＝西欧列強）VS 虐げられる者（＝アジア・アフリカ諸国）＞という構図の中での歴史観であることに鑑みれば、この立場に立って所謂左派系歴史観を批判したとしても、お互いに鏡に映っている双子のような自分を殴り合っているだけになってしまうと言えなくもないのではないか。両者共々、＜解放を目指しての闘争＞という構図の中におり、違いは、日本が虐げる側にいるか、虐げられた者を助ける側にいるか、の点だけだからだ。

基督者が歴史学を学んだり、政治／社会的課題に取り組んだりすることは禁じられるべきではないし、それどころか、信徒が生きているのはこの社会の中である以上、社会学的学びから離れるべきではないだろう。しかしながら、信仰という領域における基督者の要はイエス・キリストであるはずだ。その要が外れ、『聖書』の学びが歴史の学びへ、神への賛美が政治／社会的活動へと置き換わるとき教会は、信徒同士で、鏡に映った自分のような相手に対して批判を展開するだけの場所に変貌してしまうのではないかと、本稿筆者は怖れる。あるいは、結局＜解放を目指しての闘争＞という構図に収まるのだから、所謂保守系・左派革新系信徒手を携えて、解放を目指す運動を信仰生活の中心におこう、というのも『聖書』の示す方向性からはずれている気がする。『聖書』の説く救いはイエス・キリストであって、人である信徒が運動することによって救いがもたらされるわけではないとされているからだ。

歴史の学びは社会科学の枠組みで扱われるべきであるし、社会科学としての研究が進展するように、歴史学の歩みが歴史の真実を解き明かすようにと基督者も願うのであれば、「新約聖書における聖霊の目的は、私たちを『すべての真理に導き入れる』ことである」⁵⁸の鑑み、教会では、聖霊に満たされることをまずは、追い求めるべきではないだろうか。この世に送られるとイエス・キリストが述べた⁵⁹聖霊に励まされて歴史の学びを進め、歴史の真実へと進む代わりに、自分たちの馴染んだ歴史認識が信仰対象であるかの如く所与のものとしてあって、仮にそれを聖霊の名の下に裏書するというのであれば、かえって、歴史の学びを妨げるものとなるだろう。三位一体の神ではない、歴史認識という事項を信仰の一部としたために（あるいは神への信仰と置き換えてしまったために）、その認識から

⁵⁷ 例えば、本稿冒頭で言及した手束正昭（2013）『日本宣教の突破口―醒めよ日本』の他に、久保（2007）『神に愛された国・日本』、後藤（2011）『日本宣教論』がある。

⁵⁸ 『隠された宝』p.98。傍点は本稿筆者による。

⁵⁹ 『聖書』「ルカによる福音書」第 24 章 49 節には、「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」とある。「父」とは基督教の父なる神、「父が約束されたもの」「高いと所からの力」は、聖霊である。父・子なるイエス・聖霊の三位一体の神を基督教では信仰対象としている。

離れられなくなってしまうのが現代の日本基督教界の現状であるように見える。自分の信じているものがぐらつけば、そこにしがみつきたくなるのが人間というものだ。馴染みの歴史認識がぐらつきはじめた今だからこそ、少なからぬ日本の基督者たちがかえってそこから離れられなくなってしまうのだろう。一方、イエス・キリストの福音だけを信仰対象としている者たちは、それ以外のもの、例えば慣れ親しんだ歴史認識が揺らいでも、そこから新たな認識へと移っていける。要であるイエス・キリストの福音が揺らいだわけではないので、その要に軸足を置きながら、一つの歴史認識から他のものへともう一方の足の位置を変えればいいだけのことだからだ。結果的に日本の基督教界は、聖霊に満たされて、基督者が焦点をあてるべきはまずイエス・キリストの福音であると主張する者のほうが、かえって歴史に対して客観的な科学的アプローチを取っているという逆説的状况になっているようだ⁶⁰。

基督教界を護る牧者としての役割を任されている聖職者たちには、信徒が信仰生活の要、イエス・キリストへの信仰を失うことのないよう、改めて強く要望するものである。

参考文献

Cohn, Norman (1961) *The Pursuit of the Millennium*. [ノーマン・コーン『千年王国の追求』江河徹訳、紀伊国屋書店、1978年]

Haynes, J.E. and Klehr, H. (1999) *Venona—Decoding Soviet Espionage in America*. [ジョン・アール・ヘインズ&ハーヴェイ・クレア『ヴェノナ』中西輝政監訳、PHP出版、2010年]

後藤牧人 (2011) 『日本宣教論』イーグレープ。

加藤知子 (2009) 「『レフト・ビハインド』と千年期前再臨説とアメリカ保守派についての覚書」『星城大学 人文研究論叢』No.5。

加藤知子 (2014) 「日本基督教界における政治活動偏重のもたらす問題性」『星城大学 研究紀要』第14号。

加藤知子 (2015) 「第二次世界大戦後日本基督教界を支配した歴史認識：その問題性—女たちの戦争と平和資料館の活動を手掛かりに—」『星城大学 研究紀要』第15号。

久保有政 (2007) 『神に愛された国・日本』レムナント出版。

宮平望 (2004) 『現代アメリカ神学思想』新教出版社。

中島岳志 (2013) 『血盟団事件』文藝春秋。

日本聖書協会 (1990) 『聖書』新共同訳。

Shulam, Joseph (2007) *Hidden Treasures*. [ヨセフ・シュラム『隠された宝』石井田直二監訳、イーグレープ、2009年]。

手束正昭 (2013) 『日本宣教の突破口—醒めよ日本』マルコーシュ・パブリケーション。

⁶⁰ 『日本宣教の突破口—醒めよ日本』著者の手束正昭は、同著 pp.455・456 の中で、聖霊体験をしたと述べている。手束は、史料に基づき歴史を検討することにオープンな、日本基督教界では珍しい牧師の一人でもある。